

豆のつる リトニア



昔むかし、あるところに、ひとりのお父さんがいました。

ある日、お父さんは、豆のいっぱい入ったざるをひっくり返してしまいました。お父さんは、こぼれた豆を拾って拾って、やつと拾いあつめました。ところが、ひと粒だけ拾いわすれてしまいました。

ひと粒の豆は芽を出して、つるが長い今までとどきました。^め奥さんがそれを見つけて、「お父さん、お父さん。長いすをふたつに割ってくださいな」といいました。^{おく}おとうさんは、長いすをふたつに割りました。すると、豆のつるは、割れた長いすのあいだからどんどんのびて、天井までとどきました。奥さんが、

「お父さん、お父さん。天井をふたつに割つてくださいな」といいました。お父さんは、天井をふたつに割りました。豆のつるは、割れた天井のあいだからどんどんのびて、屋根までとどきました。

「お父さん、お父さん。屋根をふたつに割つてくださいな」

お父さんは、屋根をふたつに割りました。豆のつるは、どんどん、どんどん大きくなつて、どんどんのびて、天までとどきました。

「お父さん、お父さん。天をふたつに割るように、神さまにお願いしてくださいな」
お父さんは、神さまにお願いしました。すると神さまは天をふたつに割つてくれました。
豆のつるは、どんどん、どんどん大きくなつて、天の中までのびていきました。

「お父さん、お父さん。天によじ登つて、神さまに会いにいきましようよ」

お父さんは、豆のつるをよじ登つていきました。奥さんがあとにつづきました。ふたりは、登つて登つて登つて、とうとう天につきました。

神さまは、ふたりを案内^{あんない}して、天をあちこち見せてくれました。
夜になると、奥さんが神さまにいきました。

「神さま、神さま。あたしたち、どこで寝たらいいでしよう」

「かまどの上で寝なさい。でも、私のごたまぜ料理^{りょうり}を食べるんじゃないよ」と、神さまはいました。お父さんと奥さんはかまどの上に横になりました。

しばらくすると、奥さんがいました。

「お父さん、お父さん。神さまのごたまぜ料理、食べてみましょうよ」

お父さんは、ちょっと食べました。奥さんもちょっと食べました。すると、あつというまに「ごたまぜ料理はお鉢はちから流れおちて、ぜんぶこぼれてしましました。

朝になつて、神さまがやつてきて、お鉢が空っぽになつてゐるのを見ました。

「おまえたち、私のごたまぜ料理を食べてしまつたな。わたしの食べるものがなくなつてしまつたではないか。天からたち去るんだ」

お父さんと奥さんは、一生けんめいあやまりました。すると、神さまはふたりをゆるしてくれました。

夜になると、奥さんがいいました。

「神さま、神さま。あたしたち、どこで寝たらいいでしよう」

「納屋なやへ行つて、干し草の上で寝なさい。でも、私の馬車を乗りまわすんじやないよ」
お父さんと奥さんは、納屋へ行つて、干し草の上に横になりました。奥さんがいいました。

「お父さん、お父さん。神さまの馬車、ちよっぴりでいいから乗つてみましょうよ」「おいおい、だめだよ。神さまに天から追いだされてしまうよ」と、お父さんはいいました。けれども、奥さんは、馬車に乗りこんで、そちらへんを乗りまわしはじめました。馬車は飛とんでいつて、どうやっても止まらなくなり、こわれてばらばらになるまで走りました。

朝になつて、神さまがやつてきて、馬車がばらばらにこわれてゐるのを見ました。

「おまえたち、きのうは私のごたまぜ料理を食べてしまうし、きょうは、わたしの馬車をこわしてしまつた。さうさと天からたち去るんだ」

お父さんと奥さんは、また一生けんめいあやまりました。すると、神さまは、「ゆるしてやるのも、これがさいごだぞ」といいました。

夜になると、奥さんがいいました。

「神さま、神さま。あたしたち、どこで寝たらいいでしよう」

「果物畑くだものばたけへ行きなさい。でも、わたしのりんごを食べるんじゃないよ」

お父さんと奥さんは、果物畑へ行つて横になりました。奥さんがいいました。

「お父さん、お父さん。神さまのりんご、ほんのひと口でいいから食べてみましょうよ」ところが、奥さんがひと口食べるか食べないうちに、りんごはぜんぶ下に落ちてしまいました。お父さんはびっくりして、奥さんの髪かみの毛を引きぬいて、りんごをひとつひと

つ木に結びつけていきました。でも、奥さんの髪の毛をぜんぶ引きぬいても、たくさん
のりんごをぜんぶ木に結びつけることはできませんでした。

朝になつて、神さまがやつてきて、りんごがまき散らされているのを見ました。神さ
まは、おこりました。

「おまえたち、天からたち去るんだ。もうゆるしてはやれん。」たまぜ料理はたいらげ
る、馬車はこわす、きょうは、わたしのりんごをまき散らしてしまつた。さあ、大麦の
のぎでなわを一本ないなさい。そのなわをつたつて帰るんだよ。お父さん、おまえは奥
さんをふくろに入れて、そのふくろを口にくわえて地上に運びおろすんだ。とちゅうで、
奥さんになにをきかれても答えてはいけないよ。ふくろが下に落ちてしまうからな」

お父さんと奥さんは、なわをないました。それから、お父さんは、奥さんをふくろに
入れて、ふくろを口にくわえ、なわをつたつて下りていきました。下りていくあいだじ
ゅうずっと、奥さんは、ふくろのなかから、

「お父さん、お父さん。もう半分まで来たかしら。もう半分まで来たかしら」とききました。
お父さんは、ずっとだまつていきました。

ちょうど半分まで下りてきたとき、奥さんが、また、

「お父さん、お父さん、もう半分まで来たかしら」とききました。お父さんは、思わず、「
半分だよ、もう半分まで来たよ」といつてしましました。そのとたん、ふくろは下へ
落ちていきました。

お父さんは、地上に下りると、奥さんをさがしましたが、どこにも見つかりませんでした。

それからというもの、お父さんはひとりでくらしました。でも、そのほうがずっとよ
かつたんですよ。

のぎ…稻、麦などの実の殻にある針状の毛。

原話・『世界の民話33リトニア』

虎頭恵美子訳／ぎょうせい

再話・村上郁

